エックハルト、ラテン語説教における「愛」の概念について

中山善樹

I　エックハルトのラテン語説教

周知のように、キリスト教的諸徳のうちにおいて、「愛」(amor, dilectio, caritas) の概念は卓越した位置を占めており、その内容はあまりにも深遠かつ複雑で、到底汲み尽くすことができないほどである。エックハルトも「愛」について、多くの著作で、さまざまに説いている。それらは多面的で相互に錯綜しており、到底それらのすべてを採り上げることはできないので、ここでは、エックハルトがそのラテン語説教 (sermones) において、「愛」の概念をどのように考察しているかを検討することにしたい。その前に、エックハルトのラテン語説教について一言しておかなくてはならない。

エックハルトのラテン語説教は現在までのところ、断片的なものも含めて五六篇が発見されており、それらはすべて、教会暦の順序に従って、シュトゥットガルト版批判的校訂版全集ラテン語著作第Ⅳ巻に載録されている(1)。それらはおそらく、エックハルトの神学教授 (magister in theologia) としての講解し (lectio)、討論し (disputatio)、説

教する（praedicatio）という公的教職活動の所産であろう。またこれらのラテン語説教の聴衆も、人口に膾炙したドイツ語説教の場合とは異なり、尼僧や在俗信徒ではなく、その大部分は学僧（klerus）であったと推定されている(2)。したがってその内容はドイツ語説教と比して、よりいっそう学問的であり、用いられている概念もよりいっそう厳密である。またその内容も、テクストの編纂者である著名な中世哲学史家、J. Koch の言葉を借りれば、時として「思想の歩みの未曾有の上昇」（eine unerhörte Steigerung des Gedankenganges）を招来させる類の極めて深遠なものであった(3)。しかしまた、同時に Koch は、これらのラテン語説教が完成されたものではなく、様式と内容から推して、草稿にすぎないことを断言しており(4)、この見解は今日、広く研究者の間で認められているところである。

しかしこのことは、これらのラテン語説教の価値を些かでも損なうものではなく、かえってそれらを解読する側に慎重な手続きを要求するものであることを意味している。解釈者は常に行間に隠されている意味を汲み取りながら、テクストを敷衍的に注釈しなくてはならない。それだけに、その研究は困難を極めるが、他方、その作業を通して、解釈者は「エックハルトの仕事場」(5)を垣間見る喜びを味わうことができるのである。さらにまた、Koch によると、これらのラテン語説教は、一部を除いて、ドイツ語説教との並行箇所を見出すことはできず、したがってドイツ語説教の草稿であるということはできない(6)。

またこれらのラテン語説教の集成が、エックハルトの第二回パリ大学教授時代（1311-1313）に書き始められたと推定されうる、彼の主著ともなるはずであったラテン語による未完の大著『三部作』（Opus tripartitum）の第三部をなす「注解集」（Opus expositionum）に属する「説教集」（Opus sermonum）に相当するものであるかどうかについては、研究者の間でも見解が分かれており、現状では、Koch はその見解に反対しているが(7)、エックハルト研究者とし

て著名な D. Mieth, K. Ruh は与しているという状態である(8)。しかしいずれにしても、これらのラテン語説教の執筆時期は、現在までのところ最終的には確定されえないが、これらはおそらくエックハルト晩年のケルン時代（1322/1324-1328）に由来するものと推定することができるであろう。当時、エックハルトは、かつて師のアルベルトゥス・マグヌスが設立したケルンの Studium generale の学頭であったが、次第にエックハルトの上には、異端の嫌疑の暗雲が垂れ籠めて来ていた。

ところで、エックハルトの「愛」の概念が最も詳細に展開されているのは、ラテン語説教のうちでは、第四〇番目に編入されている「三位一体の大祝日の後の第一八の主日において」（Dominica octava decima post Trinitatem）と題される説教(9)においてである。「三位一体の大祝日」とは、聖霊降臨祭の後の第一の主日をいう。この日には、福音書からは、マタイ伝第二二章三四節から四六節までが説教されることになっていた。それらの聖句のなかから、エックハルトは特に二つの聖句を選んで、詳細に説いている。それらは、まず第一に、「あなたは主であるあなたの神をあなたの心をあげて愛さなくてはならない」（Diliges dominum deum tuum ex toto corde tuo）（22、37）であり、第二に、「あなたはあなたの隣人をあなた自身と同じように愛さなくてはならない」（Diliges proximum tuum sicut te ipsum）（22、39）である。これにしたがって説教は二部に分かたれている。このエックハルトの聖句の選択は極めてオーソドックスなものであると言える。キリスト教における「愛」の概念は、これらの二つの聖句に集約的に表現されているからである。それはまず第一に、神への愛であり、第二に、隣人への愛である。

Ⅱ　神への愛

それでは、エックハルトは神への愛をどのように説いているか。エックハルトは、「あなたは主であるあなたの神をあなたの心をあげて愛さなくてはならない」という聖句を解釈して以下のように言う。エックハルトはまず第一に、「真に愛している人」(quis vere diligit) は、「心をあげて」(ex toto corde) 愛しているのであると言う(10)。この意味では神を真に愛しているのは、エックハルトによれば、「神の子」(filius dei) 以外にはありえない。というのは、義人のみが義を真なる仕方で愛し、知っているのであり、その理由は、「子以外の誰も父を知らないからである」(patrem nemo novit nisi filius) (マタ、11、27)。ここで言われている「子」(filius) とは、子なる神であるイエス・キリストを範例的に指すことは言うまでもないが、エックハルトはおいては、それはキリストのみを排除的に指すのではなく、キリストを信じ、キリストに従って生きるすべての人々において、たとえ不完全な仕方においてであれ、何らかの程度において実現されなくてはならない可能性として捉えられている。

そのことが如実に現れているのは、エックハルトが続いて、「愛」を「愛されるもの」への「運動」(motus) として捉えていることである。エックハルトは概略アリストテレスに依拠して言う。「いかなるものも或るものに向けて動くことはない、もしそれがそこへと動くところのものの或るものをそれ自身のうちに有するのでなければ」(11)。したがって「類似性」(similitudo) は愛の原因であり、愛は、愛されるものと一なるものとなることを欲することである(12)。エックハルトによれば、神への愛は、神を愛するもののうちなる神との類似性によっているのであり、神と一な

るものとなることを欲することである。しかしまた同時にこのことは、「あなたがあなたの心をあげて愛する」すべてのものは、あなたの神であり、そのものをあなたの神として持つのであり、ないしは神として崇めるのであり、そのものに仕えるのである(13)ということを意味する。このような意味において聖書には次のように言われているのである。「彼らの神は腹である」(quorum deus venter est)(フィリ、3、19)。「というのは、多くの神々があるからである」(siquidem dii multi)(1コリ、8、5)。ここでは、神への愛は容易に転倒されうる可能性として把握されている。しかしそれにもかかわらず、エックハルトはこのような「神への秩序」(ordo in deum)はすべての戒めにおける、さらにまた一般にすべてのものにおける善性の第一の、唯一の、まったき根拠であることを強調している(14)。そして、このことにうちには、次に述べられる、隣人への愛も、このような「神への秩序」に基づいて初めて可能になるということがすでに含意されているのである。

Ⅲ　愛の行為へとわれわれを誘うもの

それでは、次にエックハルトは、隣人への愛をどのように捉えているか。エックハルトは「あなたはあなたの隣人をあなた自身と同じように愛さなくてはならない」という第二の聖句を解釈して以下のように言う。ここではまず、「愛さなくてはならない」と言われているのであり、愛の行為(dilectionis actus)が命じられているのである。そしてエックハルトによれば、そのような愛の行為へとわれわれを誘うものは三つあり、それは第一に、愛の行為を命じる者の権威(auctoritas)、第二に、愛の高価なこと(pretiositas)、ないし高貴性(nobilitas)、第三に、命じられたこ

と、すなわち愛の行為の効用（utilitas）である[15]。第一のことについては、愛の行為を命じるのは、直接にキリスト自身に他ならないということであり、そのことは「（私があなたがたを愛したように、）あなたがたは互いに愛さなくてはならないというのが私の戒めである」（hoc est praeceptum meum, ut diligatis invecem, sicut etc.）（ヨハ、15、12）という聖句のうちに示されている。さらにまた、第二の愛の高貴性は、愛が第一の賜物であり、そのうちにおいて、かつそれを通してすべてのものが与えられるところのものであり、それは神の賜物のうちで最も素晴らしいものであるということのうちに示されている[16]。そしてこのことは、「もし人が自分のすべての資産を愛のために与えたならば」（si dederit homo omnem substantiam suam pro dilectione）（雅、8、7）、「愛は死のように強いものになる」（fortis est enim ut mors dilectio）（雅、8、6）という聖句のうちに示されている。そればかりか、愛そのものは神であり、聖霊に他ならないのであり[17]、そのことは、「神は愛である」（deus caritas est）（1ヨハ、4、16）という聖句のうちに示されているのである。

ところで、エックハルトが特に注目しているのは、第三の愛の効用である。彼はそれを四つの観点から考察している。エックハルトによれば、第一に、愛は、魂に生命を与えることによって、死から魂を解放する[18]。そしてこのことは、「われわれは、われわれが死から生へと移されていることを知っている。というのは、われわれは兄弟たちを愛しているからである」（nos scimus, quoniam de morte translati sums ad vitam, quoniam diligimus fratres）（1ヨハ、3、14）、「このことを行いなさい。そうすれば、あなたは生きるであろう」（hoc fac, et vives）（ルカ、10、28）という聖句のうちに示されている。ここでは、愛は生命の根源として把握されており、魂を死から解放するものとして捉えられている。

第二に、愛は、知性を照らすことによって、神的なものの観想と認識とを明るみに齎すものとして捉えられている[19]。そしてこのことは、「自分の兄弟を愛する人は光りのうちに留まる」(qui diligit fratrem suum, in lumine manet)(1ヨハ、2、10)、「戒めはランプであり、法は光りである」(mandatum lucerna et lex lux)(蔵、6、23)という聖句のうちで示されている。

第三に、愛は敵である悪魔に抵抗することによって敵である悪魔を憎むことを可能にする[20]。そしてこのことは、「あなたはあなたの友を愛さなくてはならないし、あなたの敵を憎まなくてはならない」(diliges amicum tuum et odiohabebis in inimicum tuum)、すなわち悪魔を(マタ、5、43)、という聖句のうちに示されているのである。このことの前提になっていることは、人間は愛なくしては、自然本性的には、悪への傾向を持っているのであり、悪を憎むことはできないということである。それはエックハルトによれば、愛によってのみ可能になることなのである。

第四に、愛は、神と同化することによって人を神の子にする[21]。このことは、「あなたがたは、あなたがたの父の子であるために」、「あなたがたの敵を愛せよ」(diligite inimicos vestros)(ut sitis filii patris vestri)(ルカ、6、27:マタ、5、44ff)、「彼はわれわれを自分の愛する子の国へと移した」(transtulit nos in regnum filii dilectionis suae)(コロ、1、13)という聖句のうちに示されている。ここでは、愛はわれわれを神の子(filius dei)にするものとして把握されている。さらに、ここではまた、人間は愛なくしては、自然本性的には、神の子になりえないことが前提にされている。

Ⅳ　隣人への愛

それでは、われわれを何を愛さなくてはならないのであろうか。愛の対象（obiectum）は何か。それは言うまでもなく「あなたの隣人を」（proximum tuum）ということである。それでは、どのようにあなたはあなたの隣人を愛さなくてはならないのであろうか。エックハルトによれば、あなたは、あなた自身であるかぎりでのあなた自身を愛すべきではないのであって、あなたは神ゆえにのみ、あなた自身を愛さなくてはならないのである。このようにして、注目しなくてはならないことは、私が私自身を神のうちでのみ真に愛するように、また隣人もそのように愛さなくてはならないということである[22]。これが「あなたの隣人をあなた自身と同じように」という聖句の部分が言わんとしている第一のことである。

第二に、注目しなければならないことは、これはただ単に戒め（praeceptum）であるのみならず、約束（promissio）ないし酬い（praemium）であるということである[23]。それでは、どのような意味においてその聖句は酬いなのであろうか。その理由は、エックハルトによれば、もし私が誰か隣人を私自身と同様に愛しているならば、その場合には、私は彼の酬い、功徳（meritum）、彼の栄光（gloria）について私自身のそれらと同じだけ享受し、喜ぶからである[24]。というのは、そのような人は隣人を自分自身と「同じだけ」（tamquam）愛しているからである（マコ、12、31参照）。それゆえに、各々の隣人に属するすべてのものは、私にとっては自分自身のものであり、かつまた共通のものでもある[25]。

それでは、隣人の災い、不幸、病気総じて、エックハルトの用語を用いれば、隣人の罰（poena proximorum）をわれわれはどのように捉えなくてはならないのか。隣人の罰をわれわれは私の罰として捉えなくてはならないのだろうか。エックハルトによれば、その通りであるが、しかしながらそれは罪（culpa）としてではなく、功徳（meritum）として捉えなくてはならないのであり[26]、それは次の聖句のうちに示されている。「誰かが躓くならば、私は熱くならざるをえない」（quis scandalizatur, et ego non uror）（2コリ、11、29）。

これに関してエックハルトは四つの理由を挙げている。第一に、悲しみ（tristitia）、恐れ（timor）、それに類する情念（passiones）は徳のある人々には起こらないからである[27]。したがって罰の観念は徳のある人々には生じない。というのは、一つには愛はすべての情念を終局であるからであり、二つには、神のうちには、その属性からして、すべての善、喜び、またそれに類するものが見出されるのであるが、それらの反対のものはないからである[28]。それゆえに、神の子、神と等しくなった人（conformis deo）もそれと同様であり、それは次の聖句のうちに示されている。「彼は悲しむことはなく、不安になることもないであろう」（non erit tristis neque turbulentus）（イザ、42、4）。第二に、悪それ自体はすべての（存在者のうちには）見出されえないからである[29]。したがって罰はそれ自体として存在しない。さらに第三に、義人は隣人の罰を自分自身の罰と同様に、神によって意志されたものとして受け取るのであり、かくて彼にとってはそれは極めて甘美なものとなるからである[30]。罰が神によって意志されたものとして把握されるとき、それはすでに重荷ではなく、甘美なものとなるのであり、したがってもはや罰ではなくなる。第四に、喜ぶこととそれに類することは徳の属性であり、それらの反対ではないからである[31]。したがって徳のある人々には、すでに言われたように、悲しむことや恐れることは生じないのであり、それはセネカの次の句のうちに示されてい

る。「すべての徳と関係しているものを善きものとして、かつ相互に等しいものとして判断すること」[32]。

V　没我としての愛

以上のようにしてエックハルトは、「心をあげて」と「あなた自身と同じく」という、これらの聖句において最も重要と見なされる部分に注目して、「愛」の概念について解釈しているのである。エックハルトによれば、総括的に注目すべきことは、偽ディオニシウスに依拠して、愛は「没我」(ekstasis) を引き起こすのであり、愛している人を自分の外に置き、彼によって愛されている人のうちへと移すということである[33]。しかし注意しなくてはならないことは、この場合の没我とは、いかなる恍惚境も意味しないということである。そうではなく、それはエックハルトにおいては、我執を滅却し、自分の外へと出ていくこと、すなわち脱我を意味している。愛の本質をそのような脱我としての没我のうちに見出したことは、エックハルトの愛の解釈の最も深遠な到達点である。そしてエックハルトがこのような到達点を偽ディオニシウスに依拠することによって見出していることも注目に価するであろう。

このようにして「愛」が没我として把握されるとき、愛のうちには、いかなる我執も見出すことはできないのであり、したがってエックハルトによれば、真に愛する人は愛されるもの以外の自分自身のいかなるものもまったく、また他のいかなる人の何かも求めることはないのである[34]。したがって、人が自分自身によって愛されるもののうちにより少なく（自分のものを）求めるほど、それだけ完全に、かつより真なる仕方でその人は愛されるものを愛することになる[35]。したがって、その人がより完全に愛するほど、それだけ多くその人は自分とかの人との結合によって喜

ばされることになり、それゆえに、その人がより少なく喜びを求めるほど、それだけ大きな喜びをその人は感じることになる[36]。そしてこのことは次の聖句のうちに示されている。「私を求めなかった人々によって私は見出された」(inventus sum a non quaerentibus me)(ロマ、10、20)、「先には尋ねなかった人々が私を求め、私を求めなかった人々が見出した」(quaesierunt me qui ante non interrogabant, invenerunt qui non quaesierunt me)(イザ、65、1)。

そこから明らかなことは、エックハルトによれば、(自分自身と係わる)或るものにおける喜びを求めるすべての人は、その人を愛しているのではなく、自分自身を愛しているのであり、そのような愛は没我を生じせしめることはなく、それゆえに(真の意味の)愛ではないということである[37]。同様にして、神を本来的にして完全なる仕方で愛する人は、いかなる他のものもまったく愛することはなく、ないしはそれをより多く愛することもないのである[38]。それゆえに、注目すべきことは、そのような人は、神の外なるすべての善を、それが徳であれ、有用なものであれ、喜ばしきものであれ、ただただそのうちに彼がただそれのみを愛している神の似像(similitudo)が、ないしは神そのものが輝いているということからしてのみ愛するのであるということである[39]。

そしてエックハルトは最後に断言する。「もし人がそれと違う在り方をしているならば、もはやその人は神愛(caritas)において完全ではない。というのは、完全なる神愛はいかなる貪欲(cupiditas)も知らないからである」[40]。すなわち、最後にここでは、完全に我執を脱却した愛としての神愛が語られているのであり、それは我執に根ざすいかなる貪欲も知らないと言われているのである。そういう意味において、エックハルトのおいては、神愛は愛のうちで最も高貴な愛として把握されているのである。しかし、エックハルトは「神愛」の概念を、別のラテン語説教において

詳細に展開しているのであり(14)、彼がそれをどのように把握しているかについては、稿を改めて考察しなければならない。

注

(1) Meister Eckhart, Die deutschen und lateinischen Werke, herausgegeben im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Die lateinischen Werke, Bd. IV., Magistri Echardi Sermones, herausgegeben und übersetzt von Ernst Benz, Bruno Decker und Joseph Koch, Stuttgart 1956（略号、LW IV.).

(2) LW IV., S. XXXI.

(3) LW IV., S. XXXVI.

(4) LW IV., S. XXIX.

(5) LW IV., S. XXIXf.

(6) LW IV., S. XXIX.

(7) LW IV., S. XXIV.

(8) Meister Eckhart, herausgegeben, eingeleitet und zum Teil übersetzt von Dietmar Mieth, Olten und Freiburg im Breisgau 1979. Kurt Ruh : Meister Eckhart. Theologe, Prediger, Mystiker, München 1985.

(9) LW IV., S. 335–345.

(10) LW IV., n. 389 : quis vere diligit, utique ex toto corde diligit.

(11) Ibid., : nihil movetur ad aliquid, nisi habeat aliquid eius in se, ad quod movetur. この箇所はアラビア経由のラテン訳『形而上学』による。ギリシア語原典では、Moerbeka のラテン訳にあるこの箇所はない。Cf. Met. Θ c. 8 1050 a 1.

(12) Ibid., similitudo causa est dilectionis, rursus etiam quod dilectio vult uniri sive unum fieri cum amato.

(13) Ibid., omne quod diliges ex toto corde, ipsum est deus tuus, ipsum habebis deum sive pro deo coles et ipsi servies.

(14) LW IV., n. 391 : ordo in deum est prima, sola et tota ratio bonitatis in omni praecepto et etiam in omnibus

universaliter.

(15) LW IV., n. 392 : ad dilectionem nos alliciunt praecipientis auctoritas, dilectionis pretiositas sive nobilitas, praecepti utilitas.

(16) Ibid., Iterum patet eius nobilitas eo quod sit primum donum, in quo et per quod dantur omnia, excellentius inter dona dei.

(17) Ibid., Ergo ipsa dilectio est deus, spiritus sanctus est.

(18) LW IV., n. 393 : a morte animam liberat ⟨vitam⟩ tribuendo.

(19) Ibid., contemplationem sive divinorum cognitionem aperit intellectum illuminando.

(20) Ibid., hostem diabolum odit ipsi resistendo.

(21) Ibid., filium dei constituit deo assimilando.

(22) LW IV., n. 394 : sicut me ipsum vere amo solum in deo, sic proximum.

(23) LW IV., n. 395 : non solum praeceptum est, sed promissio sive praemium.

(24) Ibid., tantum fruor, delector et gaudeo de suo praemio, merito et gloria sua quantum de mea.

(25) Ibid., Ideo omnia proximi cuiuslibet sunt mihi propria et communia.

(26) LW IV., n. 396 : sic, sed ad meritum non ad culpam.

(27) Ibid., tristitia, timor et huiusmodi passiones non cadunt in virtuosos.

(28) Ibid., tum quia amor est finis passionum omnium, tum quia in deo ex sui proprietate cadit omne bonum, gaudium et huiusmodi, non autem opposita istorum.

(29) Ibid., malum ut sic non cadit sub li omnia.

(30) Ibid., iustus poenam proximi sicut et suam accipit ut volitam a deo, et sic ipsi dulcissima.

(31) LW IV., n. 397 : gaudere et huiusmodi sunt proprietates virtutis, non ergo opposita istorum.

(32) Ibid., omnia quae virtute contacta sunt et bona iudicare et inter se paria. Cf., Seneca, EP. 71, 32seq.

(33) LW IV., n. 398 : amor exstasim facit ponens amantem extra se et in amatum suum. Cf. De div. nom. c. 4 § 13, PG 3,

712.

(34) Ibid., vere amans sui nihil prorsus nec cuiuslibet alterius quidpiam quaerat aut cogitet extra amatum.

(35) LW IV., n. 399 : quo enim minus quaerit sui in amato, tanto illud perfectius et verius amat.

(36) Ibid., quo perfectius amat, tanto plus delectatur ex unione sui cum illo. Igitur quo minus quaerit delectationem, tanto maiorem sentit delectationem.

(37) LW IV., n. 400 : omnis quaerens delectationem ex aliquo vel in aliquo non amat illud, sed se ipsum amat, nec amor ille facit exstasim, unde nec amor est.

(38) Ibid., Amans autem deum proprie et perfecte nihil prorsus aliud vel plus amat.

(39) Ibid., talis omne bonum, sive honestum sive utile sive delectabile, citra deum in ullo prorsus amat nisi ob hoc solum quod in illo relucet similitudo dei vel ipse deus, quem solum amat.

(40) Ibid., Quod si secus, iam non est perfectus in caritate. Perfecta enim caritas nulla cupiditas.

(41) Vgl. LW IV., S. 50–74.